

# オイスカ四国研修センター設立50周年記念事業国際協力講演会

オイスカ会長 渡辺利夫

## 日本の開発協力の起源 — 八田與一を中心にして —

### 後藤新平の開発思想

「日本の開発協力の起源」というタイトルで4～50分間、日本の台湾統治に焦点を当ててお話しさせていただきます。台湾は、明治27年の日清戦争での日本の勝利によって清国（現在の中国ですが）、清国から割譲を受けた領土です。台湾は日本史上初の海外領土でした。

日本は明治維新を経て「殖産興業・富国強兵」政策を必死に推進してまいりました。しかし、それにしても、日清戦争が勃発したのは明治27年、明治維新の成功からわずか四半世紀のことでありました。まだまだ幼弱な日本が、国力と軍事力においてはるかに勝る清国との戦争に勝利したことは、日本にとって画期的なことでありました。

明治時代は、世界史的にみますと、帝国主義の時代でありました。強国が弱小国を併呑することにまったく躊躇のない、まったく当たり前のことだと考えられていた時代でありました。逆にいいますと、弱者には「安住の地」はなかったのであります。

列強に侵略されたくなければ、国力と軍事力を増強して自らが列強となるより他に道はなかったのであります。日本の力が弱ければ、間違いなく清国やロシアによる植民地とならざるを得ない、そういう「弱肉強食」の世界の中に日本はいたのです。このような時代環境の中で、日本は死力を尽くして日清戦争に挑み、これに勝利したのであります。

この勝利により、台湾は清国から日本に割譲され、日本の領土となり、その後、日本が第二次大戦での敗戦によって引き揚げるまで、台湾は50年余にわたって日本の統治の下におかれたのです。日本のごとき小国に海外領土の経営などができるものか、というのが列強の見方でした。しかし、日本の指導部は、台湾でも日本と同様の殖産興業を行い、台湾を日本と同じレベルの領土に引き上げ、日本が文明国であることを世界に示すチャンスだと考えたのであります。

そして、な第一級の政治家、軍人、官僚、技術者を台湾に赴任させ、本当に台湾を日本と同レベルの海外領土として形成してしまったのであります。明治の日本人の高い気概は、台湾開発の中に最も鮮明に表れているというのが私の見方でありました。

もちろん、民族、人種、文化の異なる人々の住まう台湾を、一挙に日本化することは容易なことではありませんでした。台湾住民の日本軍に対する抵抗にも激しいものがありました。

この抵抗を排除して、本格的な台湾開発が始まったのは、第四代の台湾総督として児玉源太郎が明治31年に着任して以降のことでした。この総督を補佐する民政長官が後藤新平でした。余談ながら、後藤新平は後に私が奉職しております拓殖大学の第3代の学長に就任することになります。

後藤新平は、台湾経営の基礎を築いた、明治期日本の代表的な有能な官僚であり、政治家でした。後藤は、明治39年に満鉄（南満州鉄道株式会社）の初代総裁として転出するまでの8年余、台湾の効率的な開発を求めて、その辣腕を振るったのです。

後藤の台湾経営の哲学は、しばしば「生物学的開発論」として知られています。つまり、個々の生物の生育には、それぞれ固有の生態的条件が必要である。だから、一国の生物をそのまま他国に移植しようとしても、うまくいくはずがない。他国への移植のためには、その地の生態に見合うよう改良を加えなければならない。つまり、日本の組織や制度や技術などを台湾にそのまま導入するのではなく、台湾にうまく適応するようさまざまな工夫をしながら、台湾の開発がなされるべきだ、概略そういう主旨が後藤新平の開発思想です。私が専攻している開発経済学の思想の根本でもあります。

台湾に古くから伝わる慣習つまり旧慣と、現場を徹底的に調査することから、後藤新平による台湾統治が始まりました。おそらく後藤新平ほど、調査の重要性を強く認識していた政治家、官僚は他にいなかったのではないかと想像されるほどです。ご存じのようにODAの世界では、開発プロジェクトの事前調査（プレフィージビリティスタディ）の重要性が説かれております。私もこのことを若い頃を教え込まれましたが、後藤新平という男は、すでに100年以上も前に、開発の現場を徹底的に調査し、その上で事業を開始しなければ、開発がうまくいくはずがないと考えた、実に真摯な人物でありました。

児玉源太郎については、皆様ご存知だと思います。後の日露戦争で満州軍総参謀長として、日本を勝利に導くのに最大の功績をなした人物であります。当然、明治の日本軍人として最高の権威をもった人物でもあります。この児玉源太郎が、明治31年に台湾の日本統治のトップであります台湾総督として赴任したのであります。この児玉源太郎台湾総督を補佐する行政長官、実質的な行政上のトップが後藤新平でありました。

後藤新平は、児玉源太郎に調査の重要性を説き、何と台湾赴任からはやくも半年後には台湾全土の土地調査、林野調査、人口調査を開始したのであります。台湾の現状を調べ尽くさねばやまないという気概でありました。

後藤新平が台湾赴任8年の中で残した実績には誠に顕著なものがあります。これらを説明する時間を得ませんけれども、ごく簡単にいいますと、一つには、台湾銀行を設立して台湾の貨幣統一を図ったこと、またこの台湾銀行の事業公債を発行し、それによって得た資金で台湾のインフラを整備したこと。二つには、そのインフラの最重要のものとして基隆から高雄までの縦貫鉄道を一挙に完成したこと、縦貫鉄道の起点の基隆と高雄にみごとな港湾を構築したこと。三つには、マラリア、ペスト、コレラなどの熱帯病の駆逐のために上下水道を設置し、当時の東京より優れた公衆衛生政策を台湾で施したこと、また日本も台湾領有期まで実に広く蔓延していたアヘン吸引の習慣を、台湾から完全に排除したこと。その他挙げ出したらきりがありません。

あえてもう一つ挙げれば、日本統治下の台湾では教育が大変に大きな成果を収めました、そのすべてが後藤新平の時代に着手され、後に花開いたものであります。植民地においてその住民にこれほど広範囲にわたって教育を施した列強など、日本以外にはありません。初等、中等教育はもちろん、高等教育も熱心に展開されました。日本への留学を一般化させ、日本統治期間の50年間で、日本の高等教育機関に留学した台湾人の学生数は、累計で20万人に及んだという統計があります。

日本の帝国大学が設立されたのは、東京帝国大学が明治19年、以降、京都帝国大学、東北帝国大学、九州帝国大学、北海道帝国大学、と続いたのですが、これに次いで京城帝国大学が大正13年、台北帝国大学が昭和3年に設立され、その後に大阪帝国大学、名古屋帝国大学の設立となったのです。

京城帝国大学と台北帝国大学という海外領土での帝国大学が、国内の大阪帝国大学や名古屋帝国大学よりはやく設立されているのです。欧米人にとっては、信じられないような事業であったにちがいません。京城帝国大学は現在のソウル大学、台北帝国大学は現在の台湾大学の淵源です。

#### 蓬莱米の創成－磯栄吉、末永仁

私はここで、オイスカの事業にも関連する農業の開発について、日本の台湾統治時代に日本人がこの地で何をなしたかについて、二つのことを申し上げてみたいと思います。「日本の国際協力の起源」という今日のテーマに即する話ができれば、と思います。

皆様、少しシニアの方であれば、「蓬莱米」というお米のことを知っているかもしれません。これは日本統治時代に磯永吉と末永仁という二人の日本人が、10年以上をかけ、寝食を忘れるほどの努力の結果、生み出した米の高収量改良品種であります。当時、台湾はもとより、日本の市場でも一世を風靡した高収量かつ美味しい米でした。

皆様、よくご存知のことと思いますが、1960年代末頃から、アジアでは「緑の革命」（グリーンリボリューション）と呼ばれる米の高収量品種の拡大・普及運動が始まりました。そして、あの食糧不足であったアジアが、現在ではほとんどの国で米の生産余剰国となっております。

経緯を述べる時間を得ませんが、このグリーンリボリューションは、実は台湾で成功した蓬莱米が、インドのパンジャブ州に移植され、そこでさらに改良されてフィリピンに渡り、フィリピンの「国際稲作研究所」でさらに改良を加えられて、全アジアに広がったという経緯があります。もし磯永吉と末永仁による10年余の努力によって作られた蓬莱米がなかったとしたら、今日のアジアのグリーンリボリューションは存在せず、すべての国が北朝鮮のような惨状であった可能性があります。

米の品種を改良するというのは、容易なことではありません。先のみえない試行錯誤を無限に重ねて、漸くにして手にすることのできるほとんど万が一の成功のようなもの、らしいのです。それがゆえにこそ、高収量品種の開発者には、きわめて高い声望が与えられるのでありましょう。

例えば、ある研究者が、草丈が低くて収穫前に簡単には倒れず、かつ籾の収量が多いという二つの性質をもつ稲の品種を開発しようとして、実験を開始したとしましょう。この実験のためには、在来種、つまりすでにその地に長らく生育しているきわめて多様な品種の中から、適切と思われる稲を選別し、それらの稲の雄蕊と雌蕊を人工的に交配してさまざまな新品種を創り出します。適切な稲の選別自体がすでに簡単なことではありませんが、そのうえに、一期作であれば播種つまり種蒔きから収穫までに一年を要します。

それでも、一年をかけて人工交配に成功したとすれば、この研究者はその人工交配によって2の2乗つまり4つの新品種の組み合わせを手にすることができます。

しかし、実際には、在来品種を改良して高収量品種の稲を得るための性質は、二つだけではありません。いもち病などの病虫害に強い、等々、現実に必要な性質は20ほどだといわれています。仮に20だとするならば、2の20乗で1024の品種を人工交配によって育成し、この中から最適と思われるものを選別し、これを土壌条件や気象条件の異なる各地域に見合うものとし

てさらに改良を繰り返していかなければなりません。いったい、どのくらいの努力を要するのか、想像することさえ困難です。

当時の世界にその名を高からしめた高収量品種が、「蓬莱米」であります。この蓬莱米は、文字通り粒粒辛苦の努力の果てに手にすることができた成果に他なりません。

台湾の米はインディカ種、日本の米はジャポニカ種といわれています。磯永吉と末永仁は、繰り返し繰り返し、台湾のインディカ種同士の人工交配を試みたのですが、どうしてもうまくいかない。そこで、今度はインディカ種とジャポニカ種の人工交配に乗り出したり、ジャポニカ種同士の人工交配を試みたりと、考えられるありとあらゆる交配に努め、ついに蓬莱前の開発に成功することになるのですが、そのために要した日本人、台湾人を含む技術者の数の膨大さ、10年余の歳月を経てようやく成功に至ったということを考えますと、万感胸に迫るものがあります。

#### 八田與一の一大プロジェクト

ところで、蓬莱米という新品種が生まれても、灌漑によってよく整備された水田がなければ、これを栽培することはできません。台湾という島は、ご想像のように、ほとんどが山地で平野部はわずかしかありません。唯一、灌漑に成功すれば水田とすることが可能な地域は、皆様にお配りの地図にあります嘉南平野しかありません。地図の右の方に、台湾の全土が赤ペンで四国に囲まれておりますが、そのうちのピンクの部分が嘉南平野です。

嘉南大圳と書かれていますが、大圳というのは給排水路のことです。南北縦貫鉄道路線図が書かれていますが、その路線の南側、地図の下の方の台湾海峡に向かって広がる、皆様お住まいの香川県とほぼ同じ面積の平原です。

台湾の中央部の嘉義、この地図の左上あたりに嘉義という町がありますが、このあたりに北回帰線が走っておりまして、北回帰線の北側は熱帯気候、南側は亜熱帯性気候です。南部は、雨季には南シナ海からの季節風で大量の降雨をもたらすのですが、乾期にはほとんど降雨がなくなってしまいます。台湾はそれほど大きな島ではありませんが、北部と南部では降雨パターンが極端に異なるのです。また、台湾の中央には3000メートル級の山々が南北に走っておりまして、その東部の太平洋側には山脈が海岸線まで迫っていて、耕地はほとんどありません。

一方、南西部には極めて貴重な平野があります。八田與一は台湾の米作地はここだ、と直感したのであります。しかし、雨期に降る雨は急峻な山脈の斜面を流れて、嘉南平野を横切り、台湾海峡に注ぎます。地図にも載っております、急水溪、曾文溪、濁水溪、これらは台湾で有数の河

川であります、この三つの河川の、台湾海峡までの距離は大変に短い。それゆえ、雨期の大量の雨水は、洪水となって嘉南平野を襲います。一方、乾期になりますと乾燥地となって耕作はほとんど不可能となってしまいます。

乾期の嘉南平野を歩きながら、八田與一は乾期には飲料水にも事欠く旱魃がつづき、雨期には洪水、加えまして台湾海峡沿いには塩害、この三重苦に見舞われている様子をつぶさに観察します。そして、この平原で水をコントロールできれば、日本の台湾統治の成果は一挙に上がると直感します。そして、さらに詳細な調査を進めます。その結果、曾文溪の支流に高さ16メートル、堰堤の長さ300メートルの巨大な烏山頭ダムを構築する計画を立てたのであります。地図の真ん中あたりに烏山頭水庫と書かれています。珊瑚のような形をしていますので、台湾では珊瑚潭と呼ばれています。

しかし、このダムだけでは嘉南平野を潤すに十分な水量が得られない。そのために、曾文溪の上流の水が必要だ。その上流の水を烏山頭ダムに導水することが絶対に必要だ。しかし、そのためには、烏山頭ダムを囲む山の土手っ腹に3100メートルのトンネルを掘削しなければならない、八田與一はそう考え、地図に烏山頭隧道と書かれています、この隧道つまりトンネルの掘削を計画したのです。

そうして烏山頭ダムで貯めた1億5000万トンの水を、導水路から吐き出し、その水を南幹線、北幹線、濁幹線という3つの幹線水路を建設し、これを山脈の裾野に走らせ、この幹線水路から、支線、分線、用水路、排水路を含めて、網の目のような総延長1万6000キロメートル、地球を半周する長さの水路を造って田畑を通そうといい、いかにも当時にあつては壮大な計画を立てたのであります。

いかにも壮大な計画であります。こんな巨大な灌漑計画は当時の日本はもとより世界でも有数のものでありました。八田與一は、何度も何度も現地を観察し、測量に測量を重ねて綿密な計画書を作成して、台湾総督府に提出し、何とその承認を得てしまったのであります、この面での八田與一の政治力にもみるべきものがあります。

このプロジェクトのすべてのフロントラインに八田與一は立って、ほとんど他を顧みることなく、このプロジェクト建設に10年以上没頭したのであります。この間、八田與一がいかに革新的な手法を持ってこの大プロジェクトの建設に当たったのか。また、この間に遭遇した幾多の困難、この困難を八田與一がいかにして克服したのか。この事実から我々が学ぶべきことは多いのですが、残念ながらこれを申しあげる時間が今日はありません。目下、私は「小説台湾」を執筆中であります。いずれ出版の運びになりますので、その時までお待ちくださいませと思います。

## 明治の時代精神

こうして構築された嘉南平野に蓬莱米を大量に栽培して、台湾をアジアで有数の米穀地帯としたのであります。もう一度いいますと、嘉南平野のプロジェクトは、総督府の命令により遂行した計画には含まれておりません。まったくの八田與一の着想であり、構想でありました。八田與一の発想を構想として計画させ、これを実現に至らしめたものは一体何だったのであるのでしょうか。

私は八田與一の発想と構想の中に、明治日本の時代精神があったのだと考えています。明治日本の時代精神を一言で表すならば「不羈独立」の気概です。他国による干渉や介入を許さず、自らの方針は自らの意思で決定して一人立つ、そういう気概であります。公と私とえば、国民の一人一人、とりわけエリートにとっては、公に生きることが生きがいでありました。個人の栄達も立身出世も、すべて公に尽くすことによってしか手にできない、そういう時代が明治でした。

現在のように、私的に生きることを重要視し、国家は対抗すべき悪だと考えるようなリベラル的な風潮の中からは、明治のエリートの気概は理解できないのではないのでしょうか。リベラル的な心情をもつ現代の日本人には、八田與一の気概は理解できないのかもしれませんが。だからこそ、八田與一は台湾では最もよく知られ、今なお深い尊敬を受け手いる日本人でありながら、日本では八田與一はこれまでほとんど知られることがなかったのであるでしょう。

明治という時代にあつては、国家の興隆と国民一人一人の人生との間にはほとんど矛盾というものがあったように私には思われます。国家と個人が労苦と歓喜を共にしていた時代が明治です。

東京帝国大学の出身というエリート中のエリートが、公のために生きないという選択肢はなかったものでありましょう。八田與一は東京帝国大学工科大学を卒業と同時に、他を顧みることなく、近代日本の初の海外領土フロンティア台湾に出向いて、青春時代と壮年時代のエネルギーのすべてを台湾の地で吐き出したのです。それがゆえの嘉南平野の開発という壮大な着想であり構想であり、さらには台湾総督府への計画書提出、開発予算の獲得につながり、幾多の艱難に耐えついにその完成に至ったのだと私は考えるものであります。時間がまいりました。以上です。ご静聴、ありがとうございました。

(以上)